

令和元年9月3日
田端ふれあい館第3ホール

第5回 (仮称) 芥川龍之介記念館検討委員会
次第

1. 開会

2. 基本的な考え方及び整備構想案 基本コンセプトについて

3. その他

(1) 今後の予定について

【配付資料】

(事前送付)

資料1 (仮称) 芥川龍之介記念館の基本的な考え方及び整備構想案 [1 基本コンセプトについて] (案)

資料2 第4回 (仮称) 芥川龍之介記念館検討委員会 (ワークショップ) まとめ

資料3 第4回 (仮称) 芥川龍之介記念館検討委員会 議事要旨

(仮称) 芥川龍之介記念館の基本的な考え方及び整備構想案

[1 基本コンセプトについて] (案)

令和元（2019）年9月3日

I 基本的な考え方

1 (仮称) 芥川龍之介記念館整備の背景

(1) 整備の経緯

芥川龍之介（明治 25（1892）-昭和 2（1927））は、大正期を中心に活躍した、日本を代表する作家です。その作品は今も多くの人々に愛され、また、40 を越える国・地域でも翻訳され、高い評価を受けています。

芥川龍之介は、東京帝国大学（現・東京大学）学生であった大正 3（1914）年から亡くなる昭和 2（1927）年まで、北区田端に居を構え暮らしました。田端文士芸術家村（後述）の中心人物でもあり、田端の住居で息子たちと木登りしたり、友人とトランプに興じたりする姿が映像に残っています。

芥川龍之介の没後にご遺族が居住していましたが、昭和 20（1945）年に空襲により焼失し、旧居跡は後に 3 筆に分筆され、集合住宅 1 棟と個人住宅 2 宅が建っていました。平成 30（2018）年にそのうち 1 棟が売却されることとなり、北区はその土地を購入し、芥川龍之介を単独で顕彰する施設としては日本初となる（仮称）芥川龍之介記念館を建設することとしました。

(2) 田端文士芸術家村と芥川龍之介

明治後半から昭和にかけて、田端には、多くの作家や芸術家が居住していました。

明治 22（1889）年に東京美術学校（現・東京藝術大学）が上野に開校すると、上野への便がよい田端には、芸術を志す若者たちが住むようになりました。小杉放庵、板谷波山、吉田三郎、香取秀真などの芸術家が次々と移り住み、画家を中心とした社交場「ポプラ倶楽部」も誕生するなど、芸術家村の様相を呈します。

そして大正 3（1914）年に芥川龍之介が移り住むことで、ひとつの転機を迎えます。その 2 年後に転入した室生犀星と競い合うように作品を発表して名声を高めていくなかで、菊池寛、堀辰雄、萩原朔太郎、土屋文明らの作家も転入し、芸術家のみならず多くの文士も住む文士芸術家村となっていきました。

短期間の居住も含めれば、二葉亭四迷、直木三十五、青木繁、岡倉天心、平塚らいてう、野上彌生子、サトウハチロー、竹久夢二、久保田万太郎、林芙美子、佐多稲子、川口松太郎、濱田庄司、田河水泡、野村万蔵なども田端で暮らし、まさに大正から昭和初期にかけての文学、芸術の歴史が刻まれた地といえるでしょう。

時代が過ぎ、戦争の惨禍等により当時を偲ばせるものの多くは失われてしまいましたが、北区では、この田端文士芸術家村の歴史が忘れ去られることのないよう「田端文士村記念館」を設立し、歴史の継承に努めています。

(3) 計画地の概要

所在地	北区田端 1-20-9
敷地面積	敷地部分 290.16 m ² * 総敷地面積は 332.85 m ² 。ただし道路拡張用用地（セットバック部分）42.68 m ² を差し引く必要あり。
建ぺい率	60%
容積率	160%（基本的には 300%だが、前面道路の幅員により）
区域区分	市街化区域
用途地域	第一種住居地域
検討にあたっての諸条件	<ul style="list-style-type: none"> ・ 建築可能な延べ床面積は最大 200 m²（東京都建築安全条例により） ・ 客席があるもの（映画館、劇場、演芸場、観覧場）は建築できない（用途地域により）



2 基本理念・目指す姿

芥川龍之介は日本を代表する作家ですが、これまで芥川龍之介を単独で顕彰する記念館・文学館は設置されていませんでした。

芥川龍之介が居住し、多くの作品を生み出したまさにその地に、日本初となる記念館を整備することは、大きな意義があるものと考えます。

これらを踏まえ、（仮称）芥川龍之介記念館の基本理念と目指す姿を次のように定めます。

[基本理念]

芥川龍之介を顕彰し、田端文士芸術家村の歴史を継承することにより、近代文学への理解と新しい価値の創造をすすめるとともに、田端エリアの魅力発信に寄与します

[目指す姿]

芥川龍之介の旧居跡という唯一無二の土地の記憶を最大限に活かし、
芥川龍之介の生きた時代、創作を支えた雰囲気
「体感」できる施設を目指します。

3 基本方針

芥川龍之介を顕彰し、その人物像や作品の理解を促します

芥川龍之介を顕彰し、その人物像や作品を継承します。また、芥川家の旧居跡に立地するという特性をいかし、家庭人としての芥川龍之介、日常生活のぬくもりも十分に伝えられるよう展示を工夫します。現在、田端文士村記念館への来館が少ない子どもや若者の来訪を増やし、区民や文学ファン、研究者など多様な人々が交流し、憩える場を目指します。

芥川龍之介の書斎や大正期の暮らしを「五感で体感」できる場とします

芥川龍之介の創作の場であった書斎、庭などをできる限り忠実に再現し、当時を偲べるようにします。

また、展示物はレプリカを中心としつつも、手に取ることができる、その場で作品を読むことができるなど、芥川龍之介の作品や、それが生み出された空気、近代文学に大きな役割を果たした大正時代の東京の文士たちの暮らしなどを体感できるようにします。

芥川龍之介に関する発信拠点として機能します

日本で唯一の芥川龍之介記念館として、芥川龍之介に関する情報収集や調査研究を推進し、各種の問い合わせやレファレンスに対応します。これにより世界中の芥川研究者を支援し、また、子どもや若者、文学ファンなど多様な人々に向けて、芥川龍之介やその作品理解につなげていきます。

田端という土地の記憶を継承し、広く発信します

芥川龍之介の人物像や作品を語るにあたり、多くの文士や芸術家たちとの交流を育んだ田端文士芸術家村の視点を欠かすことはできません。このことを踏まえ、多くの文士や芸術家たちが創造力を発揮していた田端という土地の記憶を継承し、「芥川といえば田端・北区」というイメージを全国・世界に発信していきます。

田端や北区の様々な文化芸術活動・産業・観光・教育などとも連携し、かつて芥川龍之介が実現してきた新たな価値の創造と地域交流を、現代的な手法で目指します。

これらの活動により、田端の対外的ブランド力の向上、ひいては地域住民や北区民のシビックプライドの醸成につなげます。

II 管理運営のあり方と事業展開

1 管理運営の考え方

田端文士村記念館との一体的な運営を検討します

（仮称）芥川龍之介記念館は、敷地面積や立地からくる制限により、単独で通常の文学館・美術館等としての機能を全て充たすことは困難です。

一方で、（仮称）芥川龍之介記念館用地から徒歩5分であり、田端駅前に立地する田端文士村記念館では、平成5（1993）年の開館以来、芥川龍之介をはじめとする田端文士芸術家村に関する展示及び調査研究を継続しており、資料も豊富に所蔵しています。そのため、資料の貸し借り、情報の提供などを含めた各面で、（仮称）芥川龍之介記念館の活動は、田端文士村記念館のサポートなしには成立しません。田端文士芸術家村や近隣施設との回遊促進という視点からも、この2館の連携は必須といえます。

以上を踏まえて、（仮称）芥川龍之介記念館は、田端文士村記念館と一体的な運営とすることが望ましいと考えます。これにより、資料・情報などの共有や連携に加えて、学芸員の共通での配置、調査研究の一元化など、コスト面での利点も期待できます。

2 事業内容

上記の「基本理念」「目指す姿」「基本方針」を実現するために、(仮称)芥川龍之介記念館は以下に示す事業に取り組みます。

展示公開事業

- ◆敷地面積の制限や耐震・耐火対策などにより、当時と同じ建物の再建は不可能ですが、できる限り忠実に芥川龍之介の創作の場であった書斎、庭などを復元し、公開します。
- ◆芥川龍之介の創作の場であった書斎を「体感できる」点を重視し、復元された書斎内は一部立ち入り可能として、調度品なども忠実に再現されたレプリカを中心に実際に手に取ることができるようにします。
- ◆面積的な余裕があれば、小規模な展示室を設けて、芥川龍之介の生い立ちや人物像の紹介、作品の理解や田端文士芸術家村における芥川龍之介の位置づけ等の展示を、実物資料も含めて行います。
- ◆当時の再現が難しい点の補足、限られたスペースでの充実した展示の実現等のために映像やICT技術(VR、ARなど)も活用します。
- ◆海外からの来訪者を想定し、展示解説や説明資料は多言語に対応します。

教育普及事業

- ◆当時の雰囲気味わい作家の書斎を感じることで、自然な流れの中で作品に触れる→感じる→理解する→学習する仕組みを作ります。
 - ◆館内に芥川龍之介の作品を手に取り読書できる場を整備し、また、ワークショップや講演会等のイベントを通して、作品理解を進めます。
- *施設内に劇場的な施設は整備できないこと、館内に大人数が集まるスペースの確保が困難なことから、ワークショップ実施等は田端文士村記念館等との連携を想定します。

情報発信事業

- ◆日本初で唯一の芥川龍之介の記念館として、学会論文なども含めて情報が集積する仕組みをつくり、芥川龍之介に関する情報拠点として機能します。
- ◆これらの情報を提供することで研究者を支援し、芥川龍之介研究の発展に寄与します。
- ◆芥川龍之介に関する各種の問い合わせに対応し、芥川龍之介の作品や田端文士芸術家村について、積極的に世界に発信していきます。

調査・研究事業

- ◆芥川龍之介、芥川龍之介が中心的な役割を果たしていた田端文士芸術家村、近代文学などに関する調査研究を行います。
- ◆国内外の研究者や学会、地域で活動している人々・団体などとも連携して調査研究を充実させていきます。

資料収集事業

- ◆芥川龍之介に関わる一次資料、関連の出版物などを収集します。
- *ただし、面積的な制約から収蔵庫を整備することが困難な場合は、資料保存は田端文士村記念館と一体となって行うこととします。

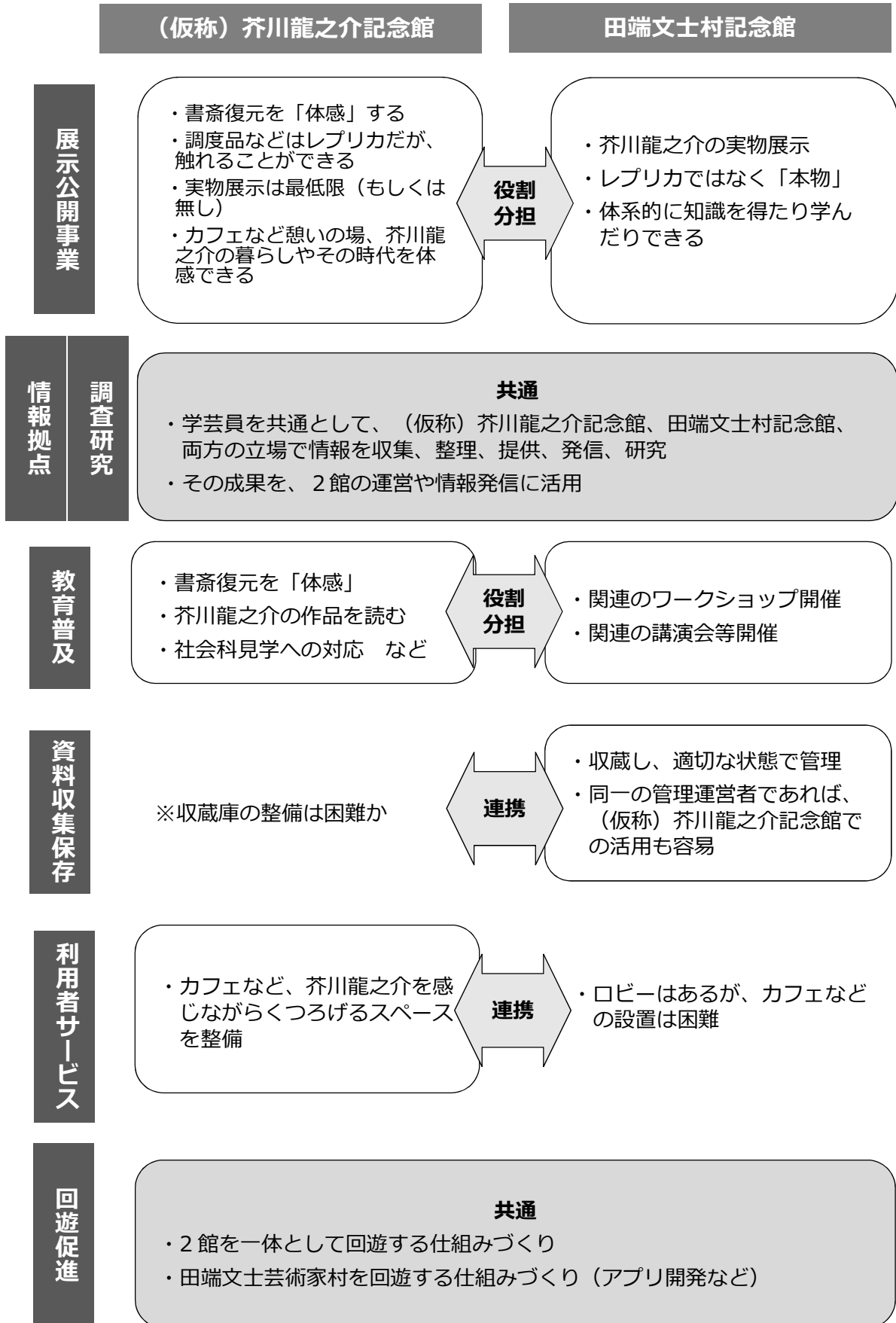
利用者サービス事業

- ◆施設全体として、ユニバーサルデザインや多言語に配慮します。
 - ◆田端駅からのアクセス動線へのサイン設置、利用案内の充実と多方面への配布、インターネット等を用いた情報発信など、施設の認知向上や利用促進に向けた工夫を徹底します。
 - ◆憩いや安らぎの提供、交流等での活用を想定して、以下の施設の整備を行います。
- ①ミュージアムショップ
- ・受付に付随し、芥川龍之介の風貌や作品、趣味などに関連するオリジナルグッズを開発・販売します。また、芥川龍之介の作品、研究書なども販売します。
- ②ブックカフェ
- ・芥川龍之介の作品を読みながら、芥川龍之介が好きだったお菓子などを味わい、ゆっくりと時間を過ごせるカフェを併設します。

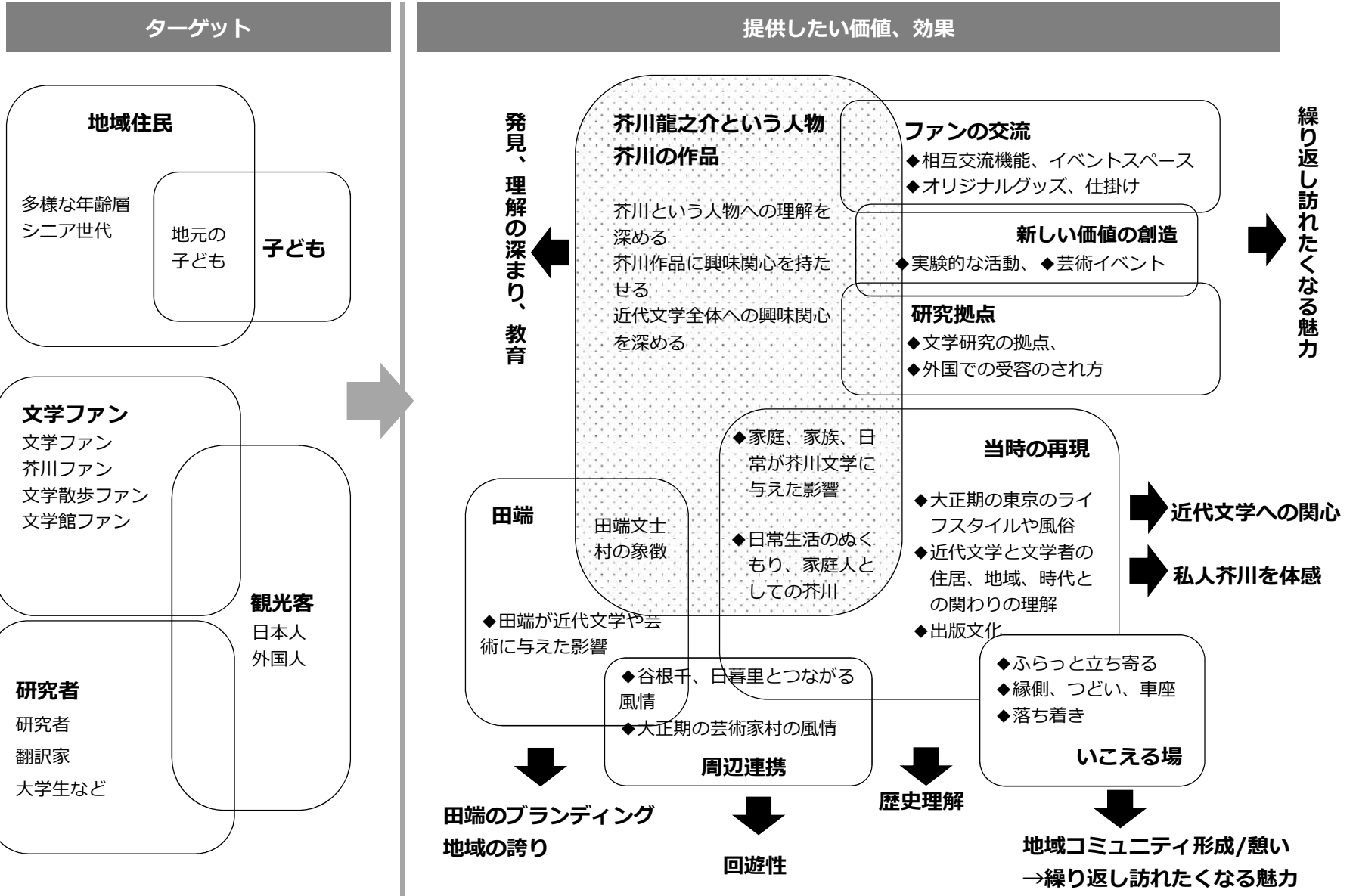
回遊促進事業

- ◆田端文士村記念館と連携し、2館を併せて鑑賞する仕組みをつくります。
- ◆田端文士芸術家村の痕跡を散策するコースを設定し、「田端」への理解を促進するとともに、来館者の田端滞在時間の長時間化を図り、周辺商業等への好循環が生まれるようにします。
- ◆童橋公園（室生犀星宅の庭石を保存）を一体的に整備し、回遊性を高めます。
- ◆史跡等が少ないなかで回遊を促進するために「田端文学散歩」などのアプリ等を開発し、楽しみながら田端文士芸術家村を回り、学習できる仕組みを作ります。
- ◆近隣にある旧古河庭園、六義園、飛鳥山3つの博物館と連携し、北区コミュニティバス（Kバス）やJRを用いた回遊性のあるルートを提案します。
- ◆近隣にある森鷗外記念館など、区外の文学館や記念館、文化施設等と連携しての事業実施を検討します。
- ◆谷中七福神（東京都台東区・荒川区・北区）など、区をまたいだ文化観光資源にも着目し、回遊促進を行います。
- ◆見て楽しい絵地図など、回遊促進のためのツールやスマートフォンアプリなどを開発します。

(仮称) 芥川龍之介記念館と田端文士村記念館の役割分担・連携のあり方 (案)



第1部



ハード（建物）に関するコメント

建造物

当時の再現

- ・当時の芥川邸のできる限り忠実な再現、日本家屋、木造
⇨舞台装置としての再現、現実的な建築物で「それらしくみせる」、「らしいもの」（本当に忠実な再現は無理では。土地面積、当時とは身長も天井高も違う）
- ・門、塀、庭（花、木、池）
- ・2階建て、階段の再現（芥川作品の中で重要な要素）
⇨平屋建て。バリアフリーや耐火などへの対応として。ただし雰囲気は変えない工夫がほしい
- ・芥川の日常生活や家族の姿が想像できる、大正時代当時の生活風景・風俗

現代的なデザイン

- ・現代的なデザインの建物（コンクリート/キューブなど）

建物内の諸室

書斎復元

- ・この建物の中核、最も大事な場所
- ・書斎内に入れて雰囲気味わえる
- ・文机で文章が書ける、原稿用紙があって万年筆があって
- ・展示はレプリカで。書棚の本などは箱に背表紙を貼っただけでもよい。ただし、安っぽくなるのは避けた
- ・衣装（着物）を着て、ぼさぼさ頭のカツラをかぶり書斎でコスプレ記念撮影できる（例：川端記念館）
- ・なりきり、レプリカに触れる等は、スタッフが大変。ランニングコストの課題

カフェ、縁側

- ・カフェは欲しい。芥川が好んだものが食べられる。縁側でお茶と和菓子
- ・カフェは難しそうだが、あればカフェだけの営業でもペイできるのでは

広間

- ・句会などは書斎とは別のスペースか。別途広間をつくる？

共通点・ポイント

*** 建物は「それらしさ」**

- ・様々な制約は仕方ないが、「それらしさ」を大切にしたい
- ・舞台装置、背景としての「再現」
- * コンクリートの新しい建物という意見も

*** 書斎復元は「なりきり芥川」**

- ・この施設の中核
- ・中に入れることがポイント
- ・芥川龍之介になりきれれる体験

*** カフェ、縁側**

- ・ゆったり憩える空間
- ・「食」の点で芥川を体感

↓
私人芥川を体感

歴史理解

地域コミュニティ形成、憩い/
繰り返し訪れたい魅力

ソフト（展示、事業等）に関するコメント

展示・事業

芥川龍之介関連、大正時代関連

- ・常設展示とイベントを合わせて芥川（文学）の公開
- ・大正アヴァンギャルド
- ・芥川と絵画とのつながりで、芥川の河童の絵、芥川の顔などを、いろいろな形で配置
- ・「時代」を知らせるDVD（関東大震災 大正の銀座通り）
- ・芥川が聴いたオペラやクラシック音楽、歌舞伎のレコード鑑賞
- ・朗読会、座敷を使った俳句の会
- ・芥川龍之介の息子たちの業績

アートなど他分野とのコラボレーション、新しい価値創造

- ・文学ファンとアートファンの融合、音楽や舞台芸術（例：前橋文学館×アーツ前橋）
- ・実験的な活動
- ・デザイン、インパクトある展示
- ・芥川に関するものをアーティストが制作（例：萩原朔太郎記念館）

学習、体験

- ・ワークショップ（和綴じの工作、座学）
- ・近所の小・中学校の生徒を、授業の一つとして「芥川記念館」に連れて行く
- ・こじんまり、地元の小学校から15人、20人単位で来て、学芸員の話聞いて理解を深める
- ・感想文募集

利用者間の交流、コミュニケーション

- ・伝言ノート、来訪者の感想ノート
- ・外国人交流スペース

グッズ

- ・芥川記念館のグッズとして、「芥川の顔」「河童の絵」などをロゴ化したハンカチ、マフラー、カップなどを売る

共通点・ポイント

* 「芥川」「近代文学」
「大正時代」

- ・上記をキーワードに、幅広くとらえる（当時の社会、音楽や演劇、映像など）
- ・芸術ジャンルとのコラボレーションなどで新しい価値創造も

* 学習は

「こじんまり」×体感

- ・体験・体感を重視するので、少人数で訪れて
- ・実際のその場で学芸員の話聞くことで、理解が深まる（美術館の鑑賞教育のように）

* 感動を伝えあえる工夫

- ・グッズとして持ち帰る
- ・コミュニケーションによるリピーター確保等



発見、理解の深まり、教育
近代文学への関心
繰り返し訪れたい魅力

周辺連携等に関するコメント

利用促進

交通アクセス

- ・導線の確保
- ・田端駅の整備により、アクセスの利便性が高まる
- ・田端文士村記念館にも芥川記念館にも、両方に行きやすい案内板や矢印の看板を多くつける

施設利用案内

- ・ホテル、図書館、田端駅近辺の飲食店に芥川記念館の案内（行き方、内容）を置く
- ・ホテルに外国人向けチラシを設置

田端文士村記念館との連携

- ・実物展示は田端文士村記念館で、ここは雰囲気味わう→そう割り切れば、(仮称)芥川龍之介記念館は木造建築でもよいのでは
- ・田端文士村が学術的なのに対して、芥川記念館はあくまで「日常、生活、家庭、家族」をキーワードにして役割分担
- ・展示物の貸し出し等ができる連携 →展示の充実
- ・両方に行きたくなる工夫

田端の活性化、回遊性、まち歩き

地域資源との連携

- ・カップパ祭の再興
- ・霜降銀座商店街・活気〈レトロ〉、アザレア通り
- ・龍之介まつり

周辺との回遊

- ・大正時代、上野、芸大が近いので文士が数多く住んでいた。
- ・案内図がほしい？
- ・区境マニア 結界
- ・区をまたいだ穴場スポット

共通点・ポイント

* 田端文士村記念館との連携

- ・それぞれの個性を生かす役割分担と連携を

* 田端の隠れた魅力の発掘、連携

- ・商店街などとの連携、祭りの再興など

* サイン表示、利用案内

- ・特に、駅からのサイン表示は必須



田端のブランディング

地域の誇り

回遊性

歴史理解

【日時】 令和元年8月2日（金） 午後2時～午後4時

【場所】 田端ふれあい館 2階第1ホール

【出席者】 6名

浅賀義男委員長、庄司達也副委員長、神田由美子委員、
菊池敏正委員、桜井美保子委員、関根和孝委員

【欠席者】 2名

浦野和也委員、中嶋稔委員

【検討事項】 （仮称）芥川龍之介記念館の方向性について、委員によるワークショップを実施した。

第1部は、委員6名で、（仮称）芥川龍之介記念館が目指す姿について、「ターゲット」「提供する内容」「達成したい効果」の3つの視点から自由に意見を交わした。

第2部は3名ずつの2グループに分かれ、建物、機能、周辺連携、ミュージアムグッズなど、具体的な内容やイメージについてディスカッションした。

第2部終了後、2グループそれぞれが話し合った内容を紹介し、ファシリテーターが本日のまとめを行った。

【説明事項】 7月24日に田端文士村記念館で開催された河童忌イベントにおいて、「孫×孫 対談」で登壇した芥川龍之介のお孫さんお二人（芥川耿子名誉委員長、芥川麻実子様）が、対談の中で、（仮称）芥川龍之介記念館への期待としてコメントした内容について、事務局から説明を受けた。